

# 近代ファッションへの「憧れ」

——『パンチ』誌にみるヴィクトリアン・サーヴァントの文化的包摂過程——

一橋大学 内海咲

## 1 目的

本報告の目的は、衣服産業が大きく転換してゆくイギリス 19 世紀中期において、労働者階級がブルジョア的ファッション文化へと排除や差異化を伴いながら選択的に包摂される過程を、近代ファッション成立の階級的要因として明らかにすることである。近代ファッション成立の背景として、労働者階級がファッションに何らかの形で関わり始めていたと想定し、近代ファッションをリードし始めていた主体を明らかにした上で、労働者階級がいかにしてファッションという近代文化を獲得していったのかを事例を通して検討する。具体的には、労働者階級のひとつの職業集団を形成していたサーヴァント（以下、女性家事使用人を総称する）を対象に、彼女たちが生きた生活空間や生活関係を、ブルジョア女性の生活構造と比較することでより鮮明に浮き上がらせ、労働者階級がブルジョア的ファッション文化へ包摂されていく過程を描き出し、その歴史的意味を近代ファッション形成の一端として考察することを目的とする。

## 2 方法

研究方法として、諷刺週刊誌『パンチ』の 1850 年代から 1870 年代まで約 30 年間分の中で描かれた諷刺画を用いる。女性が描かれた諷刺画を時代別、階級別に分類し、さらに服装に関する諷刺画とサーヴァントに関する諷刺画約 300 枚を中心に、主に生活空間に着目して分析した。

## 3 結果

上記の方法で分析した結果、サーヴァントは、ブルジョア家庭を中心とした生活空間を通してファッションへと包摂される過程が明らかになった。サーヴァントは、ブルジョア家庭という空間やウエストエンドという消費都市空間の中で生活・労働しており、それぞれの立場や生活・労働環境は異なる一方で、ブルジョア家庭内でみるファッション雑誌やウエストエンド地区のショーウィンドウを通して都市文化への強い「憧れ」意識を形成し、衣服を模倣するだけでなく、身のこなしや作法といった身体的な面においても、ブルジョア文化に染まっていくサーヴァントがいたことが明らかになった。さらに、女主人との間の距離がファッション文化を獲得する段階を決定しており、上級家事使用人である「小間使い」の役割の重要性を指摘できる。役割も関係性も多様なサーヴァントが生きた空間は、自然にブルジョアのファッション文化を身体化していく構造を持った、他の労働者階級が生きたものとは異なる特殊な空間であった。

## 4 結論

結論として、ブルジョア階級の女性がファッション文化を主導し女性としての「解放」を目指していくことの前提として、サーヴァントという女性労働者階級によるブルジョア階級への生活空間を媒介とした、経済・政治的な従属・排除と文化的な包摂関係があり、ブルジョア女性とサーヴァントの両者の相互依存関係が近代ファッション成立を間接的に促した可能性を示唆できる。『パンチ』誌に描かれたサーヴァントのファッションへの包摂は、階級・階層の境界線を積極的/消極的に越えること（衣服・身体を模倣すること）を意味し、それはブルジョア階級の人びとをさらなる消費や文化的差異化へと駆り立てる原動力となったとも考えられる。